21世紀への遺産

熊本の文化財を語る

古きたたずまい懐しく

～地名が歴史を語るまち「新屋敷」～

文化財という言葉を聞くとき、我々はすぐに古い昔の建物や美術品を思い浮べるが、案外我々の身近なところにも文化財があり、その一つが地名なのである。地名はその一つ一つが歴史をもっている。たとえば我々の住む「くまもと」。文献に見えるところでも既に六三五年前に「隈本」と記したものがあり、「熊本」に改められたのが三八〇年前であると伝えている。「くまもと」というのは山麓の湿地帯という地形にもとづくと思われるので、その歴史はもっと遡るであろう。

ところで私の住む新屋敷は、江戸時代の末まで大江村と九品寺村の一部を占めるただの畑であった。それが今から一二五年前に武家屋敷地となりはじめ、明治のはじめには安政橋筋から今の子飼橋近くまで続く屋敷地となってしまった。旧城下町に対して新しく出来た屋敷地であったから、新屋敷と命名されたのも当然のなりゆきであった。新屋敷町はその中を古新屋敷・傘渕・水道端に区分され、明午橋から大井手橋にかけての商店街は白川町と呼んでいた。

熊本地名研究会幹事
鈴木 喬さん

私の子供の頃の白川町は活気に満ちていた。なにしろすぐ近くに兵営が四つもあり、日曜には面会人や外出兵でごった返しており、満期間近になるとさらに記念品選定の客で賑わった。

しかしこの表通りから一歩中へ入ると、そこは物静かな屋敷町であった。西南戦争にも焼けなかったので一屋敷も広く、住人は旧士族を主体とし、県・市会議員、県・市主脳部・高級軍人・学者連であった。大抵の屋敷には大木があり、大きな屋敷は鬱蒼たる樹木に囲まれていた。子供達は表に溢れて夕方まで様様の遊びに興じたが、交通事故の心配など絶えてなかった。夏の白川にも楽しみは山のようにあった。砂遊び・水遊び・魚とり・とうまるつくりに時の経つのを忘れる程であった。

昭和二〇年七月の空襲で新屋敷は様相を一変した。傘渕は半分程焼残ったが、水道端はただ一軒、古新屋敷は一四軒を残して焼野原となった。それから四〇年の新屋敷の変遷は大きい。屋敷持ちの旧士族の大半は家を焼かれて土地を手放したため銀行・会社の社宅に変身する所が多く、最近はまたマンション・アパートが急増してきた。今では白川の川岸や大井手川のたたずまいと、僅かに残る和風住宅にその面影をしのぶだけである。

心のふるさと 民話とわたし

戸次の大助どん

●感想文
菊池郡大津町立
大津南小学校
5年 中村友子さん

●感想画 5年
吉良かおりさん

●感想画 5年
姫井成之さん

戸次の大助どんを聞いて、始めは、「ああ、この人は、とんちがうまいんだなあ。」としか思いませんでした。でもかもにあたった玉がたぬきにあたったところを聞いて、「大助どんは、とんちもうまいが運もいいんじゃないのかなあ。」と思うようになりました。大助どんは、かもをとるために鉄砲を曲げただけなのに、それがたぬきに当たりそして、山いもや、きじにつながっているのです。これほど運がいいってことがあるでしょうか。やっぱり戸次の大助どんだからこそこんなうまいことができるんだなと感心しています。とんちのうまい人の話はたくさん聞いていますが今までの話の中で戸次の大助どんは、一番好きな民話です。

「戸次の大助どん」

――あらまし

その昔、戸次というところは、タヌキやキツネとかがいっぱいいる深い山があって、なかなか人も寄りつけんところだったそうな。その西ん方に大助どんといってばあさんと二人暮らしのお百姓が住んどった。

大助どんは大変貧乏だったが、根が楽天家なもんで、野良仕事のかたわら、夏は川へ漁に、冬は鉄砲持って狩に出かけたりと結構楽しんで過しとったそうな。

さて、ある日のこと、近くの白川に下っていった大助どんは、カモが水面にずらっと並んでつかっとっとに出くわした。

これは得たりと、鉄砲を取って戻ってくると、今度はカモが鍋の弦のように曲ってつかっとる。「こりゃ一ぺんに撃ち獲らんとみんな飛んでいってしまう。」と、トンチの働く大助どんな鉄砲を踏ん曲げて、斜めに撃たした。すると弾丸はカモの頭をポンポンポンとみな打ちぬいて向こう岸の土手まで飛んで、ちょうどそこにいたタヌキまで撃ってしもうた。

タヌキは、苦しいもんだから土手をやたらにかじりおる。するとそこからちょっと抱えこなさんほど太か山芋が出てきた。大助どんはこりゃ芋でん包んで戻らにゃと思って、そばの茅を切るつもりがそこに隠れとったキジの頭までつかんでしもうて、茅と一緒に雁首を切りおとしてしまった。そのうえ、キジの下からは玉子が十二個とおまけまでついて、この日は芋づる式に大収穫となった。大助どんもびっくり。大量の土産を家に持ち帰ると、ばあさんと喜びあったという。

大助どんのトンチが効いたんだか…。運もそうとう強かった、ということですかな。